

巻頭言 NEURO2024 (第46回日本生物学的精神医学会年会) の開催にあたって

山末 英典
浜松医科大学精神医学講座

第46回日本生物学的精神医学会年会は、NEURO2024として、第47回日本神経科学大会および第67回日本神経化学大会と合同で、本年7月24日から27日に福岡コンベンションセンターで開催される。本大会は日本生物学的精神医学会にとっては初めての日本神経科学学会との合同開催となる。会員数で比較すると日本生物学的精神医学会は1,200名で、6,100名の日本神経科学学会や、1,500名の日本神経化学学会に比較して規模の小さな学会であるが、NEURO2024ではDeciphering the mind : transcending borders for the futureというキャッチフレーズで精神医学的な内容にもご配慮をいただき、合同大会開催に向けた準備を進めていただくことができている。通常と異なる英語での発表など、慣れない様式にもかかわらず大会参加を予定し演題登録をしてくださった多くの日本生物学的精神医学会の会員の皆様、そしてNEURO2024の執行部や大会事務局の皆様がこの場をお借りして深く感謝申し上げます。

NEURO2024の開催準備においては、約2年前から会議を繰り返し開催するなどして進められており、組織的な運営がされている。たとえば、シンポジウムの審査にあたっては、テーマやシンポジストのメンバーに加えて、シンポジストの最近の主な論文業績、年齢、性別、国籍などについても審査のポイントとなり、学術的な価値の高さに加えて、若手研究者や女性研究者が活躍の場を得やすく配慮されている。また、同じ年会内でのシンポジストの重複や近年の年会とのテーマやシンポジストの重複も避けるように配慮がされている。つまり、より最近の価値の高い論文業績を有する多様な研究者が参加して研究発表を行って議論がされることで、学術会議としての価値が高まるという考えに基づいて運営がされている。一方、日本生物学的精神医学会年会では、例年のNEUROに比較すると若手や女性研究者が明らかに少なく、同じ研究者が同一年度の年会

に複数のシンポジストで登壇したり、前年と同じような内容のシンポジウムが行われることも少なくない状況にあることを改めて感じ、学会運営の課題について考えさせられる機会をいただいた。

そのため、若手や女性研究者も含めて、より価値の高い論文業績を出している日本生物学的精神医学会会員が増えることが求められるわけであるが、一方で専門医制度などの影響で研究に携わる精神科医が減る傾向にあるように思われる。さらに令和6年度からの医師働き方改革の影響で、研究に携わる若手精神科医を増やすことも、さらには価値の高い論文業績を出す臨床精神医学講座を増やすことも、ますます難しい条件が加わっているようにも思われる。

こうした状況のなか、すでに2012年からこうした問題意識をもって学会の将来のために取り組んでくださっている若手研究者育成プログラムを運営されてきた先生方には、改めて深く敬意を表したい。このような取り組みに貢献できていない自分が私見を述べるのは非常に恐縮ながら、この場を借りて簡単に考えを述べさせていただきたい。一つの方針としては、今後の生物学的精神医学研究では、より臨床的要請が明確な研究テーマで国際的にも価値の高い研究を行うことで、臨床志向の強い若手精神科医の参加も促しやすくなるのではないかと考えている。特に大学病院においては、臨床を行うことと臨床研究を行うことの隔たりが少なくなることで、多くの若手精神科医からの研究参加を得ることが可能になるのではないかと考えている。現在選択肢がないことで治療あるいは診断ができない精神症状や予後などに対する新しい治療方法や診断技術の開発、あるいはそのための基礎研究こそが今後の精神医学研究には求められるように思っている。危機的状況は新たな進展をもたらす好機でもあり、今後の益々の日本生物学的精神医学会の発展とそれによる精神医学の発展への貢献を心から願っている。